

書内 読案

江原由美子・金井淑子編 『フェミニズム』

中道 仁美

(愛媛大学教員・会員)

フェミニズムという言葉は、
どれくらい認知されている

のであろうか。フェミニズム研究者は、自分の研究領域を「○○フェミニズム」と正確にいうことができるのであろうか。本書は、このような問いかけに、応えようとしている。本書の解題「視座としてのフェミニズム」では、フェミニズムが「社会への新たな洞察力を生み出す視座」であり、「革新的想像力の源泉」だと説く。

解題に従うなら、本書は、フェミニズムの諸潮流について、理論的枠組み（ラディカル・フェミニズム、リベラル・フェミニズム、ポストモダン・フェミニズム、マルクス主義フェミニズム、ポスト・マルクス主義フェミニズムの

5章）、実践的問題関心（レスビ

アン・フェミニズム、フェミニズムの中のレイシズム、エコロジカル・フェミニズムの3章）、専門領域における展開（フェミニズム文学批評、精神分析とフェミニズム、宗教とフェミニズム、身体／生体とフェミニズムの4章）の3つの観点と、日本フェミニズム論争史（母性とセクシュアリティ、フェミニズムと国家の2章）から構成され、各専門家が寄稿している。

本書の重要な点は、限界を指摘されるフェミニズムを含め、多様な方向に展開したフェミニズムについて、互いの関連性を意識しながら、現在の到達点を幅広く解説したところにある。例えば、リベ

ラル・フェミニズムは「アクトゥアリティを失っておらず」「先進国フェミニズムの内部」に「支配的言説である」といい、マルクス主義フェミニズムでは「労働の内容容ではなく、生産関係」を「具体的に分析し、理論化」することを課題とし、既存マルクス主義の「限界を克服する方向」を紹介している。

「フェミニズム理論の系統的学習ニーズに応える」（あとがき）ための（「系統的関連性に留意した？」）編集であり、構成は解題の枠からずれている。参考・引用文献・人物の重複もみられる。フェミニズムが精緻化して来ている現在、「○○フェミニズム」の枠に当てはめること自体、難しい。依拠する基礎理論や対象により、その数だけのフェミニズムが存在し、互いに影響しあっている。

最近、研究が進んでいるポストモダン・フェミニズムを例にとると、「ポスト・マルクス主義」同様に、近代の社会・経済システムに視点を据えており、思考枠組みには、「精神分析」「文学批評」

「レイシズム」の各章で重視されているポストモダンの潮流がある。それは、「エコロジカル」と同様近代科学について疑問を呈し、科学の進展と言説に注目する「身体／生体」にも連関する。「レスビアン」「宗教」「レイシズム」も、ポストモダンの視点をもちながら、女性の多様性の分析に取り組んでいる。

本書では、各章、歴史的展開と現状を踏まえ、その特徴と課題について、代表的人物の著作に十分に配慮した考察が加えられている。脚注で代表的人物の紹介がなされ、章末には、これら代表的文献のブック・ガイドと参考文献リストが掲載され、初心者にも研究者にも有用である。人名・事項索引も掲載され、簡易フェミニズム事典としても利用できる。多様なニーズに応えうるものとして、お勧めしたい。

(新曜社、一九九七年、本体価格
二六〇〇円)

(なかみち ひとみ)